

NSCI600

草浪

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

お題を頂けたので書き始めました。

NSCIシリーズとムラクモ600シリーズのコラボです。

退役した叢雲ちゃんたちを巻き込んでのわっち達が大暴れするお話を予定しています。

本編と噛み合わない部分がありますがご容赦ください。

N S C I 6 0 0	N S C I 6 0 0	N S C I 6 0 0	N S C I 6 0 0
# 0 4	# 0 3	# 0 2	# 0 1
37	26	15	1

目  
次

退役後、私は鈴谷が立ち上げたアパレルブランドで鈴谷の雑用として働いていた。

雑用という言い方は良く無いわね。秘書として。艦娘からただの娘になったのと同じように、私は秘書艦から秘書になったのだ。

「しっかし暑いわね……」

今年の夏は暑い。ただ立っているだけで汗が出る。

「更年期障害ってやつ？」

私の対面に座る鈴谷がボソツと何か言った。

あなた、聞こえないように言っただつもりかしら？

「そう。あなたはそんなにこの支払いをしたらしいわね。いいわ。奢られてあげる」

「……払えるなら払うよ。鈴谷、今お財布の中に二百円しかないけど」

私は思わず頭を抑えた。

確かに、私が暑いから涼みに行きましようと言った鈴谷を誘って間宮さんのところまで来た。

けど、座って早々、鈴谷は間宮さんに水を頼むとメニューを一切見ようとしなない。私がどうしたのと聞けば、お金がないと帰ってきた。

奢ってあげるとは言ったけど、まさか二百円しかないとは……

貰った金を何に使っているのだろうか。

「余計に頭がクラクラしてきたわ……」

「そんなこと言ったてしようがないじゃん！ 無い物は無いんだからー！」

「あなた、そんなに何に使うのよ……」

「秘密」

「どうせ無駄遣いでしょ？ 携帯見てて、いいかもと思っただ服は

買ったちゃう的な」

「……秘密」

凶星ね。私は知っているわ。

あなたが携帯を見ながらなんとも言えない悔しそうな表情で画面を見ているのを。

「お待たせしました。かき氷のブルーハワイとレモンです」

間宮さんがお盆に乗ったかき氷を私たちの前に配膳していく。

鈴谷はブルーハワイ、私はレモンだ。

「ごゆっくり〜」

間宮さんが去っていくと鈴谷は珍しそうに私のレモンのかき氷を見た。

「珍しいね。てつきり抹茶とか頼むと思ってた」

「そこまで落ち着いてはいないわ。私が普段頼むのは苺よ。抹茶は那珂さんね」

「そうなの？　　んで、なんでレモン？」

「日に焼けたからビタミンCをとろうと思っただけ」

「シロップじゃん」

気持ちよ、気持ち。

シロップがかかった上の部分を口に入れる。酸っぱくて甘い。

甘ったるいのが食べられなくなってきている今の私にはこっちの方がいいのかもしれない。

「見て見て！」

鈴谷がべーつと青くなった舌を出す。

「やめなさい。はしたないわよ」

「叢雲だってやるでしょ？」

「やらないわよ！」

かき氷を食べるだけでもこのはしやぎよう。

最近これが当たり前になりつつある。というのも、鈴谷のテンションが高いからだ。

というのも、鈴谷のデザインは若者女子に人気がある。ただ、鈴谷が目標としていたのはそこではない。もう少し上の年齢層がいつまでも自分らしくというコンセプトでデザインをしている。やっとその層から支持を得られ始めたからだ。

私や那珂さんを見てきたからそうだったんじゃないか。

以前、お店に奥さんと来られた指令はそう言っていた。

「それで、叢雲くん。この後の予定は何かね？」

こいつ……人のお金で食べておきながらなんて偉そうな……

「あなたは何もなし。私は今日もグラーフと一緒にドイツに持っていく商材選びね」

「じゃあ鈴谷も手伝うよ」

「じゃあ選んだ商材の梱包をお願いするわ」

「……鈴谷、デザイナー兼オーナーなんだけど」

「じゃあ選ばせてあげるわ。倉庫から商材を会議室まで運ぶか、梱包が終わったダンボール箱を車に詰めるか、今のか。どれがいいかしら？」

「頑張つて梱包する！」

「よろしい」

もともと手伝わせるつもりでいたのは言うまでもない。

――

「何だつてこんな時間にこんなところで張り込みなんか……」

運転席に座る足柄さんが眠たそうにボヤキます。

助手席に座っている野分も正直眠いです。何回も足柄さんに揺すられて起きました。

「摩耶さんが陸奥さんに応援を頼んで、摩耶さんが日向さんに応援を頼んで、日向さんが野分たちに押し付けたからです」

「そうよね。全部日向が悪いわ」

このやり取りも何度目かわかりません。

正しく言えば、まず摩耶さんが銃刀法違反で捕まえた容疑者が自白し、それを陸奥さんに報告しました。白バイ隊員だけでは対処しきれないからです。

陸奥さんがそのことを調べていると、今度は艦娘が絡んでいることがわかりました。そこで次は日向さんに報告、応援を要請しました。

しかし、運が悪いことに、日向さんは足柄さんが容疑者に誤つて

怪我をさせたしまった為、その報告と事後処理で多忙を極めています。鳴り止まない内線電話、関係各所へ提出する書類、上からの叱責。つまり、日向さんは悪くありません。では何故、足柄さんは日向さんが悪いと言うのか。

「眠い」

眠いからです。他の理由なんてありません。

「陸奥からの報告書にはなんて書いてあったの？」

「それが……字が細くて読めないんです。あと魔法がかかっていて、読もうと思うとドンドン眠たくなるんですよ」

「あら……のわっちにしては珍しいわね……いいわ。私が読んであげるわ」

野分は鞆から今さつき受け取った書類の入ったクリアファイル  
を足柄さんに渡しました。

足柄さんは書類を取り出し、しばらく眺めるとすぐにクリアファイルに書類をもどしました。

「だいたいわかったわ」

「そうですね。それで、なんて書いてありましたか？」

「現役 of 艦娘を見たら捕まえる」

「それは野分も知っています。さつき日向さんに言われましたから」

「じゃあのわっちが知らなそうなことを教えてあげるわ……私達は万が一寝てしまってもいいってことみたい」

「何を言っているんですか……？」

「あれを見て」

足柄さんはそう言うと、建物の陰に隠れている車を指差しました。その車には見覚えがあります。青葉さんのインプレッサです。から。

「……じゃあ野分は先に寝ます。責任は後に寝た足柄さんについて  
で」

「共犯よ。おやすみ」

野分はすぐに眠りに落ちました。

前日、というより今日の朝まで足柄さんの溜め込んだ書類に追わ

れていた野分にはこの硬いシートでも十分です。

「……」

「これで最後か……」

グラーフが最後のダンボールに封をした。私はそのダンボール箱に送り状を貼り付ける。

鈴谷は早々に戦線を離れ、夢の中へと離脱した。

「入れ忘れは……ないわね」

大きく伸びをする。あとは残りを車に積むだけ。

時刻は午前2時。よくこんな時間まで働いていると思う。普通に考えたらブラック企業よ。ここ。

「さて……これで間に合うな」

「間に合うも何も……納期はだいぶ先よ？」

「ムラクモ達が出掛けている間にビスマルクから連絡があつてな。なんでも洋上パーティをするから一着回して欲しいと。サイズは知っているから適当に見繕つんだ。マズかったか？」

「はやく言いなさいよ……うちとしてはビスマルクが向こうで着てくれるのならない宣伝になるわ」

「そんなケチなお嬢様じゃないさ。ちゃんとお代を頂いているし、こっちの荷物も一緒に運んでくれるそうだ」

「そうなの？ それじゃあお言葉に甘えようかしらね」

運が良かった。

これだけの荷物を送るとなると輸送費もバカにならない。

艦娘の時のツテを使っていくらか割り引いてはもらっているけど、それでも結構な額になる。

台車に荷物を乗せようとした時、私の携帯が着信を告げた。画面には那珂ちゃんの番号が表示されている。

「もしもし、叢雲です」

『あつ！ 那珂ちゃんだよ！ こんな時間にゴメンね！』

「大丈夫よ。どうしたの？」

グラーフが私のかわりに台車に荷物を乗せている。私は片手をあげてお礼をした。



『明日、ビスマルクちゃんの洋上パーティーにお呼ばれされてライブやることになったんだけど、何か宣伝する衣装があればと思ってね!』

那珂ちゃんはうちの広告塔でもある。

ライブやイベントの度にうちの商品を着てくれている。お金はいらないうちの度には、いつも代金を支払ってくれている。ただ那珂ちゃんのイメージが若いから受けるのは若い子ばかりだけど。私も那珂ちゃんもいい歳だというのに。

『叢雲ちゃん。何か失礼なこと考えてない?』

『滅相もないわ……って明日!?!』

『あつ、ごめん。もう今日だったね』

『どっちでもいいわよ! いや、よくないわよ!』

私はグラーフを見た。グラーフは急に私に見られたことを不思議そうに見ていた。

『グラーフ! その洋上パーティーはいつなの?』

『いつって明日だが……ああ、もう日付が変わっているから今日だな』

『どっちでもいいわよ! 洋上つてことは出航するということでしょう? それはいつなの?』

『あと四時間後だな』

この外人。何を呑気にしているのだろうか。

『急すぎた? 駄目そうならあるもの着ていくけど……』

『いえ……間に合わせてみせるわ』

『ごめんね? 場所は……』

『大丈夫よ。うちの外人さんが知っているはずだから。時間がないから切るわね』

私は電話を切ると、ガムテープを腕輪にし、まだ組み立てていないダンボール箱と梱包用のビニールを持って部屋を飛び出た。

『どうしたんだ!?!』

グラーフが慌てた様子で私の後を追いかけてくる。

『あなたは荷物を車に積みなさい! 私は追加の荷物を作ったらそのまま駐車場に向かうわ!』

『りよ、了解した!』

窓をコンコンと叩く音で野分は目を覚ましました。

野分は寝ぼけていたのでしょう。無警戒にドアを開け、外に出ました。

「動くな」

背後から低音の声をかけられ、寝ぼけていた頭も一気に覚醒しました。

「そんな呑気に身構えてるとぶっ殺されるぞ」

この口の悪い感じ。摩耶さんですか。

「おはようございます」

緊張の糸が解けた野分は大きく伸びをしました。水平線に太陽が顔を見せ始めています。

そういえば、野分は日向さんに言われて足柄さんと波止場まで来ていたのです。

「なんですか。あの大きな船は」

暗い時は大きな船が止まっている程度にしか思いませんでした。が、明るくなつてから見てみると、装飾された客船、豪華客船と呼べのような大きな船が停まっています。

「ビスマルクの私物らしいな。さつき陸奥から連絡があつて、この波止場に入出港する船を調べていたらこの船の名前があつたらしい」

「と、いうことはビスマルクさんをつままえればいいということですか？」

「短絡的に考え過ぎよ。ビスマルクは今夜開かれる洋上パーティのホストとしてこっちの財閥の重鎮達をもてなすのよ。そんなビスマルクをつまえたら、私達が何を言われるかわかったもんじゃないわ」

摩耶さんは胸の下で腕を組み、携帯で話す動作をしました。

「つて陸奥さんに言われたんですね？」

「そういうことだ！」

摩耶さんは指をパチンと鳴らし、野分に人差し指をむけました。

「そんなわけで、出航準備とやらでここらの人の出入りが激しくなる。二人じゃ大変だと思つてこの摩耶様が助太刀しようというわけだ」

「助かります」

野分は摩耶さんに頭をさげた。

摩耶さんはいい加減に見えるけれど頼りになります。パトロールで鍛えられた一瞬の洞察力は野分には到底真似が出来ることではありません。

「じゃあアタシも夜勤明けなんだ。車の中で少し寝させてもらうぞ。その為のヴォクシーなんだろう？」

「これは足柄さんの私物です。スカイラインは足柄さんが誤って容疑者を跳ねたので押収されています」

「ああ。武装した犯行グループに突っ込んだ車両ってお前らのスカイラインだったのか。テレビで見た時、見覚えのある車だと思っただけ」  
「そうです。足柄さんが誤ってアクセルとブレーキを踏み間違えたんです」

「そんなババアじゃあるまいし……まあ、いいや。おやすみ」

摩耶さんはそう言うのと車の中の扉を閉めました。

しかし、お腹空きましたね。足柄さんと摩耶さんも起きたらお腹を空かせているに違いありません。

ここは後輩として、野分が買い出しに行きましょう。

野分は青葉さんのインプレッサに歩み寄りました。運転席にすぐ横までくると、ドアが少し開けられて青葉さんがヒョコツと顔を出しました。

「どもどもッ！　野分さん、偶然ですね！　こんなところで何をされているのですか？」

「捜査につき、お話しできません。青葉さん。お腹空きませんか？」

「青葉は大丈夫です！　張り込み用の食料ならまだ残っているんですよ。よかったら食べますか？」

「野分はそれでいいのですが、お腹を空かせた重巡が二人もいるので足りません。よければ近くのコンビニまで行きませんか？」

「……青葉は運転手じゃありませんよ？　それにここを離れるわけには」

「野分はマニュアルなんて運転できません。張り込みなら寝ている二

人に任せましょう。きつと一人は起きてますから」

「もし離れている間に何かあれば、情報提供してもらいますからね？」

青葉さんはため息をつく、野分に横に乗るように促しました。

「お邪魔します」

――

朝方ということもあって、道は空いている。

そんな中、捕まるか捕まらないかギリギリの速度で私はアバルトを走らせている。私の焦りとはよそに、横に乗る鈴谷はピースカ寝息をたてて寝ている。

那珂ちゃんの舞台衣装とパーティ用の衣装を用意し、大急ぎで駐車場まで行くと眠たそうに目を擦る鈴谷とテキパキと動くグラーフが社用車のワンボックスに荷物を積んでいた。けど、荷物が多すぎた。助手席を倒し、その上に荷物を置いてはどうしても一個だけ

あふれる。今から箱を開けて詰め替えては間に合わない。

私はあふれた荷物を自分のアバルトに乗せた。

「グラーフ！ 道案内は任せたわよ！」

「任せろー！ この時間帯なら空いているし取り締まりもない！」

オービスの位置も全て把握している！」

そう言いワンボックスに乗り込むグラーフ。私はそこまで飛ばせとは言っていない。

鈴谷は何も言わずに私のアバルトの助手席に乗ると、シートベルトをして、車が動き出す前に寝た。

私は積荷満載のくせにやけに速く走るハイエースを必死に追った。

「なんとか間に合いそうね」

私はビルの合間から登ろうとしている太陽を見てひとまず安堵した。

休みなく走り続け、なんとか船の積み込みの時間には間に合った。はずだった。

「……叢雲？」

車から降りた私は名前を呼ばれた。

正直、今は困る。知り合いと話し込むなら全てが終わってからにして欲しい。

私は振り返り、声の主を見た。

「……足柄?」

そこには妙高型重巡洋艦三番艦の足柄つばいのがいた。

向こうも私のことを不思議そうに見ている。

それもそのはず。私と足柄には艦娘時代も顔見知り程度の付き合いしかない。

「……んで、こっちは鈴谷?」

「そうよ。この寝坊助は鈴谷よ」

「あんた達、こんなところで何してんの?」

「それはこっちのセリフよ」

いまいち会話が噛み合わない。

それもそのはず。あまり話したことの無い人と久しぶりにあった。けれど、私としては呑気に話し込むわけにはいかない。それに向こうは何故か私のことを怪しんでいるようにも見える。

「……あなたもパーティーに出席するのかしら?」

「あなたもってことは、あなたは参加するのね?」

言葉遊びをしている場合じゃない。けれど、何か含みのある言い方に余計なことは言えない。

「しないわよ。ちよつと向こうで話を聞かせてもらえないかしら?」

「嫌よ。私には時間がないの」

私は話を強引に打ち切り、トランクを開けて荷物を取り出そうとした。けど、荷物に伸ばした腕は足柄に力強く握られ届かなかつた。

「いったいわね! 何すんのよ!」

バツと足柄の方に振り返ると、足柄は睨むように私を見ていた。正直怖い。こんな目を見るのは艦娘の時以来だ。

足柄は空いている手で何かを取り出し、それを私に提示した。

「海軍特別犯罪捜査局です。叢雲さん。よければお話を聞かせ頂け

ないでしようか？」

「特捜が私に何の用よ……」

しばらく足柄と睨み合っていた。けど、その均衡は寝坊助によって破られた。

鈴谷は助手席から飛び出すと、私の腕を掴んでいた足柄の腕を掴み、足柄を睨んだ。当然、足柄も鈴谷を睨み返す。

「おばさん。その手を離してよ。鈴谷達は急いでるの。話ならあとでいくらでもしてあげるからさ」

「あら？ お嬢ちゃんは今自分の立場がわかっていないようね。これ、立派な公務執行妨害だけど？」

「別になんでもいいよ。鈴谷達は悪いことしてないし」

「なんだ？　なんかあつたのか？」

足柄の後ろから聞き覚えのある声が聞こえた。

このガラの悪そうな口の利き方は……

「摩耶？」

私と鈴谷の声がハモる。

私は足柄から視線を外し、足柄の背後を覗き込むように見た。

「叢雲さん！　それに鈴谷も！」

「何、あんた達知り合いなの？」

足柄は振り返り、摩耶を見た。摩耶は頷くところちらに歩み寄ってきた。

「艦娘だった時に同じ鎮守府だったんだ。足柄。手を離してくれ。その人たちはチャカを振り回すような人じゃない」

「チャカ？」

また私と鈴谷の声がハモる。足柄は私の腕を離し一歩下がった。

かわりに摩耶が前に出てきて、私と鈴谷に挨拶をした。

「お久しぶりです。元気そうで何より」

「あなたも海軍特別捜査局の人間なの？　チャカって何？」

私がそう言うと、摩耶は首を横に振った。

「アタシは同業だけど所属は違います。チャカについては……まあそのうち話すとして、荷物を改めさせてもらってもいいですか？」

疑ってるわけじゃないんですけど、そうしないとあれが納得しそうにないんで」

「お婆さんの次はあれ扱いですか」

足柄は不機嫌を隠そうとしない。まあ、私もあまり面識のない子にお婆さん扱いされたら気分良くないけど。

「鈴谷達、急いでの。これをあの船に積まないといけないんだから」  
「すぐ終わらせるって……もし間に合わなかったらうちの上司と向こうの上司に頼んで出航遅らせてもらうからさ」

「ならいいけど……いったい何なのよ……」

摩耶は何も答えず、ダンボールの中身をあらためた。

中に摩耶達が探しているものなんてあるわけない。なのに、摩耶は顔をしかめた。

「Chee'sの洋服がこんなに……？　これ、なんですか？」

「何も、うちの商品よ」

「うちの商品？」

摩耶は訝しげに私を見た。いまいち言っている意味がわからな  
いと言った様子だ。

「あつちの車の積荷も全部うちの商品だよ！」

鈴谷が自慢げに言う。様子を見ていたグラーフが車から降りてきた。

「降ろすか？」

「降ろして頂戴」

グラーフの問いかけに足柄が答えた。

グラーフは私の方を見ていた。私は頷いて了承した。

「……こっちも洋服ばかりね」

「失礼ですけど、叢雲さん達、何してるんすか？」

摩耶がそう言うのと、鈴谷はポケットから名刺入れを取り出した。

鈴谷がポケットに手を入れたことで、足柄と摩耶は一瞬だけ警戒を強めた。

鈴谷はそんなことは一切気にせず、一枚名刺を取り出して摩耶に渡した。

「うちの商品って……これ、鈴谷がデザインしてんのかッ!？」

摩耶が驚きの声をあげた。

「ふふうくん!　　そうだよ!」

「おい、マジかよ……アタシも何着か持つてるぜ……」

「なに二人で盛り上がってんのよ……」

足柄が呆れたような声を漏らす。それに対して更に呆れたのが摩耶だ。

「いま若者の間で人気のあるブランドだよ。足柄はそんなことも知らないのか……いや、知るわけないか」

「ちよつと!　　なんかすごい失礼なんですけど?」

「何でもいいから、はやく終わらせて頂戴」

私がそう言うと、足柄は業務的に中をあらためたはじめた。一方、摩耶は一枚一枚吟味しながら目を輝かせていた。となりで鈴谷が商品説明をしている。

もう時間がないっていうのに……

その時、やかましい低音を響かせている車が近くに止まった。

――

いろいろ買い込んだせいで時間がかかってしまいました。

波止場に戻ると、足柄さんと摩耶さんがワンボックスから荷物を降ろし、中をあらためていました。

「何をやっているんですか?」

青葉さんの車から降り、足柄さんに声をかけると、不機嫌そうな足柄さんが振り返りました。

「荷物検査」

足柄さんは短くそう答えると、作業を続けました。

「えつと……叢雲さんに鈴谷さん、グラーフさん……ですよね?」

「そうよ。あなたは野分ね」

クリーム色の小さい車に寄りかかって腕を組んで作業を見ている叢雲さんが不機嫌そうに答えました。名前と顔を知っている程度の認識しかありませんけど、なんで不機嫌なんですか。足柄さん、いったい何をしたんですか……



「どもども！ 青葉です！ みなさんお久しぶりです！」

空気を読まず、青葉さんが元気よく答えました。

「手伝います」

野分はそれ以上何も言えず、手の付いていないダンボールを開けて中身をあらためました。

中身は……

「Chee'sの洋服？ これも……これも……」

「うちの商品よ」

近づいてきた叢雲さんが答えました。

「いいなあ……欲しいなあ……」

野分は小さく呟いたつもりですが、足柄さんには聞こえていました。

「知ってるの？」

「那珂さんがよく着ているブランドです」

「よく知っているわね」

叢雲さんが関心したように言いました。

対して、足柄さんは少しガツカリしたような。

「アオーバ。いい趣味じゃないか」

「この子ですか？」

「そうだ。パワーはどれぐらい出てるんだ？」

「計ってませんが、300そこそこは出てると思います」

「四駆だと少なく思えるな」

「何を言いますか。これぐらいが丁度いいんです。というより、最近の二駆が馬力出過ぎなんですよ」

青葉さんとグラーフさんが盛り上がっています。

叢雲さんは盛大なため息をつきました。けど、今度は足柄さんが羨ましそうに二人を見ていました。

「手、止まってるわよ」

叢雲さんに指摘され、足柄さんはため息をつき、いやいやという様子で作業を再開しました。

「悪いわね。無理言つて」

摩耶や足柄の荷物検査は思いの外早く終わり、無事ビスマルクに引き渡すことが出来た。

「ホントよ。グラーフから今日つて言われた時にはどうなるかと思つたわ」

今日が土曜日でよかつた。私はこのまま鈴谷を送り、家に帰つて寝ることが出来る。

「ごめんなさい……グラーフには無茶しなくていいと言つただけど、大丈夫だ。任せろの一点張りで」

「事実大丈夫だったじゃないか」

どうしてあなたが自信満々に答えるのよ……

もうどうだつていいわ。仕事は終わったのだから。

「ビスマルク……よね？　少し話いいかしら？」

あたりを見回し、何かを探している捜査局の面々。そのうちの一人、足柄がビスマルクに自身の身分を明かす手帳を見せ声をかけた。

「ええ。構わないわ。何かしら？」

ビスマルクは素敵な笑顔で答える。

「あなた、日本に銃火器を持ち込んだりしてないわよね？」

「いえ、持ち込んでるわよ。ほら」

ビスマルクはあつけからんと答えると、まわりにいた黒いスーツを着た外人に何か指示をした。外人さん達は頷くと、上着から拳銃を取り出してみせた。

「USP……フルサイズのものね」

「それだけじゃないわ。船内警備の人間にはMP5を持たせているわ。それが何か問題？」

呆れた。足柄は捜査官。それがわからないビスマルクではあるまい。

足柄も呆れたようにため息をつくとき、腰に手を当て何も知らない

子供に叱るように口を開いた。

「いい？　この国はそういう危ないの持ち込むのも、堂々と見せびらかすのも駄目なの。それにあなたは元艦娘でしょ？　もしそういうのを持ち込みたいのなら私達特捜に申請を……」

「申請なら大分前にしたわよ？　まあ、許諾が降りたのが入港直前で焦ったけど」

「あら……そうなの？　あとで確認してみるわ」

「送られてきたPDFなら今見せられるわ……ほら」

ビスマルクはそう言うのと携帯を取り出し、足柄に画面を見せた。

「ノワキが承認してくれたのよ」

「……ならいいわ」

足柄は何かを思い出したようなバツの悪そうな顔をした。

概ね、溜め込んだ書類仕事に首が回らなくなって、野分に泣きついたんでしょね。それで、野分が何をやったか確認する時間すらない程溜め込んでいた。

「……何？」

「いえ、別に」

ジツと見ていた私に気がついた足柄は見ないでと言わんばかりだ。

大丈夫よ。私も経験あるわ。野分側だけどね。

「それで、聞きたいのはそれだけ？」

「単刀直入に聞いわ。銃を密輸しようとしている艦娘知らない？」

「知らないし、そんな子いないわ」

私もビスマルクの意見に賛同するわ。けど、知らないうちに巻き込まれている子はいらるでしょうね。

「それもそうよね……悪かったわ」

「気にしてないわ。あなたも仕事頑張りなさい。今度はもつと早く承認して欲しいわ」

バレてる。足柄は申し訳なそうに会釈をして野分の方に歩いていく。

しかし、今度は鈴谷を連れた青葉がやってきた。

「どもども！　今度はお二人のお話を聞かせてください！」

もう早く帰りたいのだけど。ああ。ダメね。鈴谷はやる気満々。

「グラーフ……車の鍵貸して頂戴。しばらく寝るわ」

「私もそうさせてもらおう……」

グラーフも限界に近い。よく見ると半分目が閉じている。

「鈴谷！　私達は車で寝てるから終わったら言いなさい！」

「叢雲さんとグラーフさんは一緒に寝るほど仲がいい……つと」

「うちの秘書と広報部長なんだよ」

「なるほど……」

「鈴谷。もし青葉が変なこと記事にしたら私やめるからね」

「ちよッ！　叢雲！　大人気ないよッ！」

私は鈴谷を無視し、グラーフが運転してきたワンボックスの後ろのドアを開けた。

荷物が満載されていたそこに今は何も無い。フルフラットになった空間に横になると、グラーフも同じように横になった。私は転がってグラーフのスペースを作つてやる。

「これぐらいで大丈夫かしら？」

グラーフは横になったまま何も言わない。

返事ぐらいしなさいよ。というか、ドアを閉めなさい。

そう文句を言おうと思つていると、規則正しい呼吸音が聞こえてきた。

「もう寝てる……」

私は起こしたくない体を起こし、グラーフを起こさないようにドアを閉めた。

――

ビスマルクから話を聞き終えた私はしばらく積み込みを監視していた。多くの業者が出入りし、荷物を積み込んでいく。この中に危ないものが混じついてもわからないわね。

同じような光景に飽きた私は野分の横に立った。

「何か不審な様子は？」

「これと言って特には。さすがビスマルクさんですよ。有名な店の料理人やら、食材やら次々に運び込まれています。いったいどれだけの規模でやる気なんでしょうね」

「もともとビスマルクはドイツ経済界重鎮のご令嬢。そんなご令嬢が艦娘になって世界平和に貢献した。いまや彼女は世界から注目される女性の一人よ」

「戦争に参加して大戦果をあげた艦娘とドイツ経済界に強い繋がりがあある。それだけで交友関係を持ちたいと思う人も多いということですか」

「そういうことよ。それに叢雲。あれは相当のやり手ね。鈴谷にどれだけの才能があったにしろ、ブランドを成長させたのは叢雲の力あつてのことね」

「少しかだけ叢雲さんのことを調べました。どうぞ」

のわっちはそう言うもって持っていたタブレットを私に渡した。

画面には叢雲の経歴が書かれている。

「艦娘時代は秘書艦。退役後は鈴谷ブランドの秘書。艦娘時代のコネを使って那珂やビスマルクに商品提供。つまりあの二人に広告塔になつてもらつたと」

「那珂さんと叢雲さんは艦娘時代の先輩後輩にあたります。野分の知らない那珂さんを叢雲さんは知っています。二人の関係はより強力だと思ふべきでしょう」

なんとなく、のわっちの言い方にトゲがある。

よく見るとムスツとしているような、そんな気さえしてくる。

「もしかして妬いてるの?」

「……少し羨ましいだけです」

のわっちはそれ以上何も言わなかった。そしてもう一人、叢雲と関係がある人物がいる。

私はタブレットをのわっちに返し、もう一人の後輩に歩み寄つた。

「サボつてないでちゃんと見張れよ。アタシなんてもう十人には声かけたぜ」

私が近寄ると、摩耶は自慢げに言い放った。

別に人数が多ければすごいわけではないのだけど。

「ちゃんと仕事してるわよ。私なんてビスマルクに声かけんだから」

「世間話でもしたのか？」

「そんなところね。摩耶。あんた叢雲の後輩でしょ？　　どういう人

だったのよ？」

私がそう言うと、摩耶は私のことを睨んだ。

「まさか、叢雲さんを疑っているのか？」

「さっきのわつちに叢雲に関する資料を見せてもらってね。彼女、相当やり手じゃない」

私がそう言うと、摩耶は私の胸ぐらを掴んできた。その反抗的な態度に私も摩耶を睨む。

「叢雲さんはそんな人じゃない。あの人はどんな時だつてアタシや鈴谷、神通さん、仲間の為に頑張ってきた人だ。それに神通さんが尊敬している人だ。そんなこと、絶対にするわけがない」

「神通？　　あの海軍の問題児の？」

「問題児……？」

摩耶はキョトンとした顔で私を見た。手を離すと、私に説明を求めた。

「私も時々監査で彼女の訓練風景を見ることがあるけど……若い海軍兵士が泣きながら訓練しているのを神通は嬉しそうに見てるわよ。それに訓練終わり、なんて言うか知ってる？」

「あなた達が出来なかつた分は私がやっておきます。あなた達はゆっくり休みなさい」

摩耶は凄く嬉しそうな笑顔を作り、嬉しそうにそう言ってみせた。

それが神通の真似だということはすぐにわかった。

「なに。知ってたの」

「知ってたのも何も、アタシも神通さんの教育を受けてるんだぜ？」

神通さん基準の少しキツメの内容＋神通さんのやりたい内容を訓練兵にやらせて、出来なかつた分を神通さんが引き受ける。だから訓

練兵は頑張らないと、どんどん神通さんが強くなるからついていけなくなる」

「あれ、そういう意味だったの？」

「そうだぜ？　あの人、自分が強くなりたいたけだから。教官なんてやってるのも自分の訓練の時間が取れるからなんだよ。訓練時間中、平然とした顔でアタシ達が出来ないことをやってみせて、どうしてこれぐらいのことも出来ないのって叱られるんだ。そこで終わればいい方で、その日の最低基準すら達成出来ない、今度は特別訓練、神通さんとトレーニングが待ってる。肉体面だけじゃなくて精神面も追い詰められるんだ。生半可な気持ちで訓練してるから出来ないんだ。今日までの訓練をキチンとこなしていれば出来るはずだっかね。神通さん基準で話をされても困るぜ、なんて言った日にはそれはそれは地獄の日々の始まりだぜ」

「あんだ、随分詳しいわね」

「昔、反抗して半年以上神通さんと朝から晩まで一緒だったからな」

「あなたよくそれで嫌いにならなかったわね……」

「ちゃんと最後まで面倒みてくれたからな。話は逸れたけど、そんな神通さんが尊敬する叢雲さんが銃の密輸に関わるわけがない」

摩耶はそう言うとのわっちと同じようにブスツとした顔をする。

けど、わかったことがある。叢雲には軍とも強い繋がりがある。

「疑いたくはないけど……やろうと思えば出来る環境にいるのよね」「てめえ……まだ……」

「私は海軍特別犯罪捜査局の捜査官。仲間を疑うのも仕事の一つの」

私はそう言い、再び叢雲に話を聞くことにした。

叢雲とグラーフが乗り込んだ車に近づくと、ダンボールが積み上がった台車を押す鈴谷が見えた。そういえば叢雲だけが犯行を行えるわけじゃない。この鈴谷にもやろうと思えば出来ることだ。

「おっ？　足柄さんじゃん。暇ならちよっち手伝ってくれる？」

前言撤回。この子はそこまで出来る子じゃない。

「いいけど。何させようって……」

「この上のダンボール運んどいてくれる？  
てくるから」

鈴谷は戻って残り取っ

「わかったわ」

これなら警戒されずに接近できる。私が台車の取っ手を掴むと、鈴谷は難しい顔をして私を見た。

「鈴谷、足柄さんみたいに力無いんだけど」

「……あなた、私にダンボールだけ持っていけと言うんじゃないでしょうね？」

「足柄さんならユウっしょー！」

屈託のないいい笑顔を私に向ける。

ああッ！ もう仕方ないわね！

私はダンボールだけを持ち上げると、鈴谷は軽くなった台車を反転させた。

「じゃあよろしく〜」

重いわね……いったい何が入っているっていうのよ！

両手で抱え、前が見えない私は横向きに歩きながらワンボックスに近づき、車の近くにダンボールを降ろす。

「あんた……何やってるの？」

窓からヒョコツと顔を出している叢雲が私のことを不思議そうに見ていた。

「あなたの上司に運ぶように頼まれたのよ」

「あら……それは悪かったわね」

叢雲は顔を引つ込めるとドアを開けて外に出てきた。

大きく伸びをする。艦娘の制服とは違い、落ち着いた服を着る彼女は標準的な駆逐艦よりも少しだけ大人びた印象を受ける。

「もう三時間も経ってるじゃない。よく寝たと思うはずだわ」

「ワーカーホリックみたいなのを言うわね。少し働きすぎなんじゃない？」

「出来ない元重巡の上司を持つと、出来る元駆逐艦は大変なのよ」

「うちには仕事を押し付ける元航空戦艦殿がいるの」

叢雲の嫌味をサラリと受け流して見せると、叢雲は肩をコキツと



鳴らした。

「面倒ついでに頼まれて頂戴。飲み物買ってきて」

「あなた……捜査局をなんだと思ってるのよ……」

「健全な艦娘の為に頑張る機関」

健全な艦娘ねえ。

「話が終わったら買ってきてあげるわ」

「嫌よ。私は今何か飲みたいの」

「ワガママな子ね……」

「歳を取る大変なのよ。疲れやすくなるし、この暑さも堪えられないわ」

叢雲はそう言うのと私に近寄り肩を叩いた。

「まだ時間かかりそうだからコンビニでも行きましょう。車出してあげるから、話はそこで聞くわ」

そう言われ、私は叢雲の後に続いた。

「……フィアットじゃなかったのね」

「うちの子はアバルトよ」

敏腕秘書の車と言われれば納得できる。

けれど、それだけじゃない。

「しかもマニュアル」

私が助手席に乗ると、叢雲はエンジンをスタートさせた。

見た目からは想像できないエンジンの振動がシートから伝わる。

叢雲は窓を開けると、台車を押している鈴谷に大声で声をかけた。

「鈴谷！ 私達近くのコンビニ行ってくるから終わったらそっちに来なさい！」

「鈴谷も行くッ！」

「ワガママ言わない！ 場所は後で連絡するわ！」

叢雲はそう言うと、クラッチを繋いで発進させた。

「あなた、運転うまいわね」

「グラーフほどじゃないわ」

近くのコンビニまでは少し距離がある。

足柄は私に話があると言った。けど、その話をしようとはしない。

せっかく話しやすい環境を作ったのに。

「捜査局の仕事は大変なの？」

話さないのなら仕方ない。かと言って何も喋らないのも気まずい。

「そうねえ……無口な上司とよく出来る部下に苛められることを除けば普通のOLと変わらないかしら。あなたはどうかなのよ？」

「無茶苦茶なことを言い出すデザイナーに振り回されっぱなしよ」

「でも嫌じゃないんでしょう？」

「そうねえ……同じ理不尽でも嫌な上司にやらされていた昔に比べれば今の方が楽しいわ」

足柄は少し考えると納得したように頷いた。同じような経験があるのかしら。

「けど偶には嫌になるでしょう？」

「偶にじゃないわよ。今日の仕事だって聞いたの昨日の深夜よ。そこから用意して、運んで……どれほど帰って寝たいと思ったことか」

「そんなのうちじや日常茶飯事よ。それも飲もうと思った日に限って事件が起きる。結局私は美味しいお酒じゃなくて濃くて苦くて美味しくない珈琲を飲みながら頑張らなきゃいけない。勘弁してほしいわ。本当に」

「捜査局は大変そうねえ。いくらうちが忙しいと言っても、そつちはやってることが違うわ」

足柄はしばらく黙って私を見ていた。そしてため息をつく。

「私はあなたを容疑者として疑っているわ」  
「チャカがどうのってやつかしら？」

私は思わず動揺した。けど、不思議とそれが顔や動作に現れるほどじゃなかった。不思議と冷静でいられる。そもそも、お巡りさんを助手席に乗せて車を運転していること自体が異常だ。

「そうよ。艦娘が銃の密輸に関与している。なんてタレコミがあつてね。あなたならやろうと思えば出来るんじゃない?」

私は少し考えた。

確かに出来ないことはない。けど、それはかなり大掛かりな仕事だ。知り合い全てを巻き込まなくてはならない。そうなれば当然、それをよく思わない子が出てくる。

「出来ないわね。いくら私がそれをしたいと思っても誰かが止めるはずよ」

まず神通あたりが私の所に来るだろう。

スーツを着てパイロットサングラスをかけた私が倉庫で密輸した銃を片手に葉巻を吸う。そこに白装束を着た神通が日本刀片手に乗り込んでくるだろう。私はそんな神通に切られてお終い。

「あなたにノーと言える子なんているのかしら? 摩耶なんてあなたのこと、全面的に信頼してたわよ」

「いるわ。まず鈴谷ね。あの子は平気で私に嫌だって言うわ。あと那珂さん。逆に私がノーと言えないわ」

「どうかしら? あなたが本当に困っていると知ったら」

「それでそういう事に手を染めたのなら、私は人知れずに殺されているわ」

那珂さんあたりに。確実に。

「物騒なこと言うわね」

「事実よ。けど、私はそれでいいと思ってるわ。もしそうならね」

足柄はため息をつく、横目に私を見た。

しかし、私が銃の密輸の犯人だと思われているとは思わなかった。

そうねえ。

「じゃあ赤いジャケットでも着てワルサーでも持ちましょうか」

「じゃあなに、私はキツネ色のトレンチコートでも着ればいいのか?」

「あばよおゝ 足柄のおばさあゝん!」

「誰がおばさんよ! それにそれは泥棒でしょう」

私は思わず笑ってしまった。足柄も何度目かわからないため息

をついたけど、やっと表情が緩んだ。目元が笑っている。  
結局コンビに着くまで、誰がどの役をやるかで盛り上がってしまっ  
た。

足柄とコンビニまで来た私はとりあえず缶コーヒーではなく、その場で機械が淹れられる珈琲を二つ買い、片方を足柄に渡した。

「いいわよ。これぐらい払うわ」

「大丈夫。経費で落とすから」

店員さんが渡そうとしなかったレシートを財布にしまった私は機械にコップをセットしてボタンを押した。

この時期はアイスコーヒーに限る。割高に思えるMサイズではなくてLサイズ。これにミルクを一個、シロップを二個入れるのが私流だ。

私と同じタイミングで機械に入れた足柄は出来上がると蓋もせずに飲み始めた。

「品が無いわね……」

「これが私流なのよ」

なるほど。彼女なりの飲み方というものがあるそうだ。

ミルクとシロップを入れ終え、蓋をつけてストローをさす。

さあ、一口飲むわよ。というタイミングで私の携帯が鳴った。マナーモードにしている携帯が私のシオルダーバッグを揺らす。

足柄が気を利かせて私の珈琲を持つてくれた。

「そんなに嫌な顔しなくても珈琲は逃げないわよ」

「悪いわね……もしもし?」

『叢雲か? グラーフだ。すまない。後ろからぶつけられた。この後合流できそうにない』

グラーフの声には苛つきがある。

「大丈夫なの?」

『私は問題ない。だが、派手にぶつけられてな。車とビスマルクから貰ったお土産がパーになってしまった。デュンケルだ。全て割れてしまった』

「ビールね。それよりも車の方が問題だわ。相手さんはなんて言って

るの?。」

『逃げられた。というよりこいつじゃ追えないな。黒いランサーだ』  
「らんさー?　まあ、なんでもいいわ。あとのことはお巡りさんに任せなさい。あなたのビール代もきっちり回収させるわ」

私は電話を切つて足柄から珈琲を受け取った。

足柄は何かあったのかと言わんばかりに首を傾げている。こういう動作が素でやるから男慣れしてそうとか言われるんじゃないかしらね。

「グラーフの車がぶつけられてね。当て逃げされたのよ」

私は空いている手で足柄の肩を叩いた。

「……そういうのは陸奥の仕事よ」

「私は何でもいいのよ。ぶつけた相手から修理費が貰えればね」

「すっかり経営者になられて……それで、ランサーって言ってたわね」

「そうよ。らんさー?　っていうのにぶつけられたらしいわ」

「型と色はわかるかしら?」

「黒つて言ってたわ。型つてなによ?」

「あなた。あんなの乗ってるのに詳しくないの?」

「あんなのとは何よ。あの子はあんな小柄なのにターボなのよ!」

「知ってるわよ。エディツイオーネマセラティ。贅沢品意外何物でもないわ」

「あんなの呼ばわりしないで頂戴な」

そう。あの子は私の子だ。

OL時代に頑張った私が私の為に買ったご褒美だ。買ってすぐに艦娘になつてしまったけど、あの子がいたから私は上司の小間使いも出来たし、那珂さんの厳しい訓練に耐えられた。あの子がハマシヨウを歌いながら適当に走るだけで全てがどうでもよくなる。

「悪かったわ。あなたの愛車だもんね」

足柄は珈琲に口をつけながら、私のアバルトを感慨深そうに眺める。

「いいものよ。好きな曲掛けながらゆっくり街中を流すのも。あなたも性能や実用性では無く、あなたが惚れた車を買ってみればいいの

よ。いい額貰ってるんでしょ？」

「私には妙高姉さん。那智、それに羽黒もいるわ。みんなで出かけるために大きい車が必要なのよ」

足柄は少し羨ましそうな目で私を見ていた。

そうね。懐かしいわね。私もあの子に無理させて鈴谷と神通、摩耶を乗せて遠出をしたことがあったわね。買った時は後ろの座席に人を乗せることなんて考えてもいなかったわ。

「それに！ 私はあなたみたいに古い趣味はないのよ」

「あら？ 言ってくれるじゃない。古い趣味とはどういう意味かしら？」

「私はジョン様が好きなの」

「じよんさま？ ヨン様的なやつかしら？」

「JBJ。そう言えばわかるかしら」

「私、アレックがいた時の方が好きなのよね」

「私はどつちも好きよ」

足柄。私と世代的にはいい勝負するんじゃないかしら？

――

日本人女性のことを大和撫子というらしいが、最近はこの大和撫子も絶滅危惧種になってきた。私はそう思う。

鳳翔さんほどじゃないにしろ、私は大和撫子だと思っている。何故なら私には控えめなところがあるからだ。横でハンドルを握り、上機嫌な陸奥とは違う。

ただ座っているだけなのに背中からエンジンの振動が伝わってくる。

「お前に足柄を預けたのは失敗だったのかもしれない」

「あら？ 通勤途中に車を壊した乱暴者が何を言っているのかしら？」

何も言えない。

今朝、寝ぼけていた私は間違って4から1に入れてしまった。

自分でも何故そんなことをしたのか。よくわかってはいない。ただ一つ無駄な動作が入ったことに気がついた時には既に左足を離

していた。

「それに聞いたわよ。あなたが無茶苦茶な注文を明石と夕張にしたつて」

「無茶苦茶とはなんだ。お前のこれほど無茶苦茶じゃない」

陸奥の無茶苦茶な車。NSX。国産スーパーカーとさえいいだろう。

それも何故かオープン。私の髪をバタバタと風がなびかせる。

「仕方ないでしょ？」

私は今日非番だったの。それなのに、あなたが足がないから来いと言うから仕方なく運転手してあげてるの。それさえなければ、私はお昼までゆっくり寝て、落語番組見ながら美味しい晩御飯と缶ビールで晩酌出来たというのに」

「奇遇だな。私も足柄という面倒な部下がいなければ、上からのお説教も無く、出来る部下にお前らの案件を押し付けて鳳翔さんのところで一献やってたはずなんだがな」

「でもそうも言ってられなくなっただんではない？」

陸奥のいう通りだ。

元艦娘が武器の密輸に関与していた。あれは嘘だった。

いや、嘘ではない。元艦娘が武器を運んでいたことには変わりない。ドイツ製の銃火器を運んでいたのはビスマルクだということまではわかった。が、それはビスマルク、言い方を変えればドイツ経済界のご令嬢を警護する為の銃火器だ。

しかし、この国に持ち込まれる銃火器や弾丸と出ていく銃火器や弾丸の数字が合わない。

それは当たり前だ。私が正式な手続きをして受け取っているのだから。

しかし、ビスマルクがこの国に置いていく数と、私たちの手元に入る数が違う。

これはどこに流れているのか。その答えを摩耶は見つけだした。「向こうは今頃大慌てよ。あなた達の弾丸をくすねているのがバレた。そしてあなた達が直接取りに行っただとなれば黙っていないでしょうね」



「偶然に偶然が重なり過ぎたな。そもそも、摩耶の白バイに発砲したのが向こうの落ち度だ」

「摩耶だってそこまでバカじゃないわ。拳銃を隠し持っている輩を見過ぎすわけないじゃない」

「速度違反の高級外車をサイレン鳴らしながら煽り続けたのはどう説明するんだ？」

「成績が欲しかったのよ」

「どうだかな……どうせ途中で楽しくなって追いかけて回してたんだろうな」

「けど、そのおかげで大金星を上げることができたわ」

陸奥は軽くブレーキを踏んでハンドルを切る。

「おい！　ふざけるな！」

屋根がないこの車には捕まるところがドアしかない。

「急いでるんでしょ？」

「向こうには足柄と野分がいる！」

「あら？　心配ね。任せて。すぐに送り届けて上げるわ！」

――

足柄さんの車に大量のビスマルクさんからの土産を積んだ野分は、なれない大きい車、それも先輩である足柄さんの車を運転し横にはよく喋る鈴谷さんに乗せて疲れ果てていました。

足柄さんから送られてきた住所のコンビニに着くと、足柄さんは叢雲さんと呑気に珈琲を飲んでいました。

「すごいね！　のわっち運転うまいね！　叢雲の次にうまいよ！」

「ありがとうございます……」

「何か甘いものでも買ってあげるよ！　元気出して！」

車から飛び降りた鈴谷さんは叢雲さんに片手をあげて合図をすると、コンビニの中に入っていきました。

野分は足柄さんに車のキーを渡して報告をしました。

「ビスマルクさんから日向さん宛の荷物。そして野分たちにと土産をいただきました」

「ご苦労様。日向宛のお土産をつて何よ？」

「中身は見ていませんが、なんでも頼まれていたもの、だとか」

「怪しいわね。まあ、開けたら何言われるかわからないし、そのままにしておきましょうか」

「そうですね……」

足柄さんとそんな話をしていると青葉さんのインプレッサ、摩耶さんのR1000が煩い排気音を響かせながら入ってきました。

「うつるさいわね！」

「叢雲さんの車も人のことは言えないと思います」

「私のはいいのよ」

そんなことを話していると、コンビニでの買い物とは思えない量のビニール袋を持った鈴谷さんが野分にアイスを差し出しました。

「ほい。のわっち」

「ありがとうございます」

鈴谷さんからスイカバーを受け取り、袋から取り出して一口。

この種のチョコチップが美味しいんですね。

「まだまだいっぱいあるから遠慮しないでね」

鈴谷さんはニツと笑うと、袋の中に入っているアイスを見せてくれました。

「じゃあ私はこれに……」

叢雲さんが袋の中に手を伸ばそうとすると、鈴谷さんはバツと袋を遠ざけました。

「……勝手に鈴谷を置いていった叢雲にはあげない」

「何拗ねてんのよ……」

「ふくんだ！ のわっち。二人で食べようね！」

正直、痴話喧嘩に野分を巻き込まないで欲しいです。

「そう言えば、グラーフさんは？ 野分たちより早く出ていかれましたけど」

「その件で仕事が入ったわ。グラーフの車に当て逃げした黒いランサーを探さないといけないのよ」

「当て逃げ!?! グラーフは大丈夫なの!?!」

鈴谷さんが驚いた様子で聞くのに対して、叢雲さんは冷静でした。

「グラーフ自身は無事よ。まあ、あの子が単純な事故で怪我するとは思えないけどね」

「ならよかった……」

「それより鈴谷。その中に入っている抹茶アイスを私に寄越しなさい！ 私はいま抹茶の気分なのよ！」

「……あげないもん」

「あなたも野分も抹茶なんて食べないでしょうに」

自信満々に言い放つ叢雲さんに対して何か言いたそうな鈴谷さん。

野分は鈴谷さんの持っていた袋の中から高価そうなやつのコレートを取り出しました。

「鈴谷さん。スプーンがありません」

「あつ……のわっち、ごめん。貰ってくるね！」

鈴谷さんが慌てて店内に駆け込んでいきました。

「叢雲さん。謝ったほうが……」

キンキンに冷えているアイスを両手で包み込むように持ちながらそう言うと、叢雲さんはため息をついて答えました。

「謝れば調子に乗るのよ」

何故でしょうか。日向さんに謝られた足柄さんが自慢げにしている映像が頭の中に浮かびました。

「のわっち？ 何で私を見ているの？」

「いえ……別に……」

「ごめん！ のわっち、お待たせ！」

帰ってきた鈴谷さんはそう言うと、野分にプラスチックのスポーンを手渡してくれました。

「ありがとうございます」

「じゃあアタシはレモン貰うぜー！」

「青葉はミントをいただきますね！」

「じゃあ抹茶をもらおうわ」

「仕方ないわね。ソーダを貰うわ」

摩耶さんと青葉さん、それに便乗した叢雲さんと足柄さんにアイヌを取られ鈴谷さんはどこか不満そうです。

「まあ、いいけど」

「……そう言えばあなた。財布の中に二百円しかないって言っただけだった？」

叢雲さんがそう言うと、鈴谷さんはビクツと肩を震わせました。

そんな鈴谷さんの様子を見た、叢雲さんは睨むような目つきになりました。

「あなた。まさか会社のカードを私の了承なしに使ったんじゃないでしょうね……？」

「ちゃんと仕事に使うものも買ったし！　ほら！」

鈴谷さんは慌てて袋の中からファッション雑誌を取り出しました。

「……なんで付録付きのものしかないのかしら？」

「そつちのほうがお得かなくって……」

「オーナーなら自分のブランドの物を持ちなさいよ！」

――

その後、皆さんと別れて、野分と足柄さんはオフィスに戻ることになりました。

「結局、何も掴めずでしたね」

「そうね。新しい仕事が増えただけ……ね」

ハンドルを握る足柄さんの目が少し険しいものになった気がしました。

「足柄さん？」

「ちよつと飛ばすかも。つか……」

足柄さんが言い終える前に、助手席のドアが野分に襲いかかりました。

「んにゃー！」

足柄さんの慌てた声。そして目の前に迫る中央分離帯。

足柄さんの車はそのまま中央分離帯に乗り上げました。目の前

の視界が一回転、二回転。

ガントツ!

何かが金属を叩くような音で野分は目が覚めました。

真つ白な何かが目の前にあります。

「エアバッグ?」

ボンヤリとする意識の中で、野分の頭に血が上っていくのがわかりました。

しばらく……とはいっても時間的には30秒程度でしょうか。助手席側のドアを乱暴に開けられたかと思うと、野分は外に引きずり出されました。

「大丈夫?」

「はい。野分は大丈夫です」

「そう。ならよかったわ」

声の主は足柄さん。いつもより声のトーンが数段低いです。

ボンヤリしていた意識がはつきりとしてくると、足柄さんは頭から血を流し、顔の右半分が赤く染まっています。

「足柄さん! 大丈夫ですか!」

「割れたガラスで切っただけよ」

足柄さんは野分の頭をポンポンと叩くと、ひっくり返っている車をじっくりと眺めていました。トランクが開けられ、野分が積んだはずの荷物がありません。

「足柄さん! 日向さん宛の荷物がありません!」

「そんなことどうでもいいわ」

怒ってる。握りしめられた拳が震えています。

「足柄さん?」

恐る恐る声をかけると、足柄さんは睨むように野分を見ました。

「のわっちは日向に連絡して頂戴。グラーフの事故とこの事故、無関係じゃないわ。次に狙われるのは叢雲達か青葉、摩耶の誰か。青葉と摩耶はほつといでも大丈夫だけど、叢雲達が危ないわ。直ぐに保護してもらおうように日向に伝えて」

「了解しました……足柄さんは……」

「私はやる事が出来たから」

足柄さんはそう言うと、タクシーを捕まえて、運転手さんを脅すとどこかに走っていきました。つまり、この事故の処理は野分にやれということでしょう。

――

足柄と別れ、帰る方向が同じだった青葉と一緒に信号待ちをしていると、黒くてうるさい車数台が私たちの二台を囲んだ。

バックミラーを見ると、青葉が興味深そうにその車を眺めている。

「似た者同士……って感じかしら？」

青葉の車と大きさや雰囲気はなんとなく似ている。

けど、うるさい車に囲まれるのはあまり好きじゃない。少しだけアクセルを煽っておく。

私は信号が青になると同時にポンとクラッチを離して繋いでやると、軽くホイールスピンをしながら急発進をする。

けど、それが正解だった。

「嘘でしょ……」

横にいた黒い車が急激な幅寄せをして割り込もうとしたからだ。

青葉はシレッとそれを避けると、急加速をして私の後ろにピタリとつけた。

「叢雲！　安全運転で帰ろうよ！」

何も知らない鈴谷が怒る。けど、それどころじゃない。

後ろからドンッと小突かれた。

目の前には高速の入り口。

「ちよッ……ちよつとー！」

「ナニ!？」

「私にもわからないわよッ！」

ブレーキを踏んでも止まらない。というより、後ろの青葉に押されている。

「何考えてるの!?!」

バックミラーで青葉を見ると、青葉は真面目な顔で「前を見ろ!」  
だか「早く行って!」だかわからないジェスチャーをしている。

私は訳の分からぬまま、料金所のバーを突き破り高速に乗った。

幸いにも、高速の交通量は少ない。すんなりと本戦に合流し、文  
句を言おうと青葉の車に並ぶ。

「うわっ……」

鈴谷が声を漏らす。私は何も言えなかった。

青葉の車の後ろ半分がべっこべこに凹んでいた。恐らくあの黒  
い集団に当てられたのだろう。青葉は横にいる私たちに早く行けと  
ジェスチャーを送っている。ふとバックミラーを見ると、さっきの黒  
い車が追いかけてきた。

「鈴谷……しっかり掴まってなさい……」

「他にすることは?」

「110番して。それから出来れば足柄達に連絡をして頂戴」

「足柄達の番号は知らないけど……とりあえず摩耶に連絡する」

「いつもこれぐらいの判断してくれると助かるんだけどねえ……」

「そんなこと言ってる場合ツ!?!」

鈴谷の言う通りね。

私はギアを下げ、タコメーターの針をトルクバンドに放り込ん  
だ。

野分から足柄の車が事故を起こし、自走不能になったと聞き、私と陸奥は大慌てで現場に向かった。

足柄が無茶な運転でもしたのだろう。そう思っていたが野分の慌てようからしてそうでないことはすぐにわかった。そんな中、私の携帯が青葉からの着信を告げた。

「もしもし」

『青葉です！　黒いランサーに追われています！　　叢雲さんが危ないです！』

「落ち着け。状況は？」

『いま叢雲さんの後ろを走っています！　　青葉の後ろには黒いランサーが3台！』

「場所は？」

『横羽線、東京方向！』

その時、電話からゴツツと鈍い音が聞こえたかと思うと、布に擦れたような音が聞こえた。それっきり青葉の声は聞こえない。

「陸奥！　摩耶に連絡しろ！」

「もうやってるわ」

陸奥は携帯を片手に一般道でアクセルを踏み込む。

「緊急事態だ。サイレンを……」

「あなたねえ。屋根もない車のどこにサイレンを乗せるのよ。それにこれは私の私物よ……もしもし！　　摩耶！　　いますぐに横羽東京方向に乗りなさい！」

陸奥が携帯に向かって叫ぶ。

警官が運転中に携帯を片手に運転してもいいのかと疑問が浮かぶが既に法定速度なんてものはとおに超えている。

「陸奥。ついでに高速を封鎖しろ」

「摩耶！　　ついでに高速を封鎖しなさい！」

きつと電話の向こうで摩耶が「はあ!?!　　何言ってるんだ!?!」と



言っているに違いない。

「つべこべ言わずにやりなさい！ 日向さんの命令よ！ 私じゃないわ！」

人のせいにしたな。まあ、私でもそうする。

――

「なんだ……随分と騒がしいな……」

雪風を肩に乗せた武蔵さんがそう言うと、横にいた長門さんも不思議そうにパトカーが通り過ぎていく通りを見ていました。

「なにかあったのか？ 騒ぎになるようなニュースは出ていないが……」

「そんなニュースより、ツツタカターの方がはやいんじゃないのかい？」

既に出来上がっている隼鷹さんが缶チューハイ片手にそう言います。つまり、私はいま手が塞がっているから見てくれ、ということでしょう。

「じゃあ雪風が見ますね。あとツツタカターじゃないです」

雪風は鞆から携帯を取り出し、眩きSNSのアプリを押すと、この近くで車が横転する事故があったという眩きがありました。

「この近くで横転事故があったそうです」

「カーアツ……情けない。私なら絶対にそんな事故起こさないね」

隼鷹さんが缶チューハイを飲みながら言います。

「朝起きて、すぐに飲み始めるようなやつは事故なんて起こせんだろう？」

武蔵さんが呆れたように言いました。

「平和になったから朝から朝から気兼ねなく飲めるんじゃないか。もう恐さを忘れる為に飲む酒なんてごめんだよ」

隼鷹さんはそう言うと、残っていた缶チューハイを一気に呷ると、美味しそうに一息着きました。そして、近くのコンビニを見つけると寄っていきこうと言いはじめました。

「あまり飲み過ぎるなよー」

真新しい缶チューハイを二本買い、一本を鞆にしまった隼鷹さん

に長門さんはきつく言いました。

「いいじゃないの。ライブなんだし盛り上がり過ぎてあげないと……雪風に頼まれて仕方なく最前列のチケットを取った長門さんに申し訳ないじゃないか」

隼鷹さんはニヤニヤしながら長門さんを見ていました。

「うッ！　うるさいなッ！　そうだ。私は雪風に頼まれたからチケットを取ったんだ。そうんだろ。雪風！」

「はい！　長門さんに頼めば絶対にいい席を取ってくれると思ったので頼みました！」

雪風が長門さんに頼んで取ってもらったチケット。それは福永司令と浜野司令のライブのチケット。二人は終戦後、すぐに退役してミュージシャンになっていました。長門さんは浜野司令の追っかけをやっています。だから今回、二人が出演するライブのチケットを長門さんをお願いして取ってもらいました。

「おまッ……雪風ッ！　余計なことを言うんじゃない！」

「だってライブが近くなると長門さん浜野司令の歌の鼻歌を歌いながら仕事をしているじゃないですか！」

「雪風ッ！」

長門さんは雪風を掴むと前後に揺らし始めました。結構強い力で揺らされたので思わず武蔵さんの頭を掴んでしまいました。

「おいッ！　馬鹿ッ！　やめろ！　眼鏡が落ちるッ！」

「長門さんに言ってくださいあい！」

――

「何これ……何なのよッ!？」

私は青葉の車にもものすごく煽られている。そして青葉の車は黒い車に煽られている。

「すごい……」

鈴谷はシートベルトを外し、窓から身を乗り出して後ろを見ている。

「鈴谷！　馬鹿やってないで大人しく座ってなさい！」

「はあ〜い」

鈴谷は渋々といった様子で席の座った。この子状況がわかっているのかしら？

それとおかしいことがある。走らせれば走らせるほどに車の台数が減っていく。それに電光掲示板。いつもは渋滞情報をこれでもかと表示させて私を萎えさせているのに、今日はどれも真っ黒。何も表示させていない。

そして更におかしいことがおこる。

深緑に塗られた装甲車が料金所のバーを突き破って合流してきた。

「そこまでするって……私がいっただい何をしたっていうのよ！」

「……あの車、どっかで見たことある気がする」

鈴谷がそう言うのと、装甲車は車を左端に寄せウインカーをたいた。「お先どうぞ」の意味だ。横に並んだら幅寄せされて私のアバルトがペシヤンコになるんじゃないか。私はそんな気がした。

「……一気に抜けるわよ」

アクセルをガンツと床まで踏み込む。

1. 4 Lターボの心臓が軽い車体を強烈に引っ張る。装甲車を抜く瞬間、鈴谷が「あっ！」と声をあげた。

けど抜けなかった。装甲車は横に並んでいる。

「叢雲！　　叢雲！」

「何よッ！」

「叢雲さんッ!!」

鈴谷に呼ばれ、横を向いた瞬間聞き覚えのある声が聞こえる。

「神通ッ!？」

「そうだよ！　　あれ、神通さんの車だよ！」

鈴谷が嬉しそうに手を振る。

「あなた、今そんな状況じゃないでしょッ!!」

神通の怒号が聞こえる。私も同じことを鈴谷に怒鳴りつけたい。

鈴谷はビクツと体を震わせると、そそくさと窓を閉めた。

「叢雲。はやく行こう。神通さん、怒ってる」

「私はこの状況でも能天気なあなたに怒りを通り越して呆れつつある

わ

「どんな状況であれ、鈴谷はあの人より怖いことを知らない」

私的那珂ちゃんと同じね。

そんなことを考えていると、神通は私の車までギリギリに寄せ、コンコンと窓を叩いた。

これがゆっくり走っているならまだしも、私はアクセルを床までベツタリと踏み込んでいる。正直、ものすごく怖い。

「鈴谷、窓を開けなさいッ！　はやくッ！」

鈴谷が渋々窓を開けると、神通は無線機を投げ入れてきた。

それと同時にすつと離れる。

『摩耶から連絡を受けて駆けつけましたが……どういう状況ですか？』

「野蛮な車に追われているのよ。理由はよくわからないわ！」

『つまりい……後ろの車を全部始末すればいいってことだね！』

私の背筋に嫌な汗が流れる。この声は聞いたことがある。忘れるようにしても絶対に忘れられない声。

「那珂さん！」

『那珂ちゃんッ!!』

無線機からプンプンという効果音が聞こえてきそうなほど機嫌のいい那珂ちゃんの声。

どうしてあなたがここにいるの、そう言いたいけど、このままじゃ青葉まで片付けられてしまう。

「那珂ちゃん！　黒い車だけよ！　青い車は青葉だからね！」

『りようか〜い♪』

那珂ちゃんがそう言うと、神通はスツと車を下げた。私の車に青葉が続く。

青葉の車を抜かせた神通はスツと青葉の後ろに入った。

そんな神通の車を黒い車達は両側から抜きにかかった。

『じゃあ神通ちゃんは右の車を、那珂ちゃんは左をやるね』

『わかりました』

無線から二人のやりとりが聞こえたかと思うと、神通の車の両側

のドアが同時に開いて何か飛び出した。神通の車はそのままもう一台後ろにいた車を巻き込んで派手に横転する。

サイドミラーで何があったのかを確認する。運転席側のミラーには黒い車の上に乗る神通、助手席側には川内と神通の中間ぐらいの長さの黒髪をした川内型、那珂さんが同じく黒い車の上に乗っている。

二人とも、同じように運転席側の方で屈むと、右腕を大きく振り上げた。

「すごい……映画のロボットみたい……」

きつと鈴谷の頭の中には殺戮ロボットの映画の主題歌が流れているんでしょね。

「……すごい、青葉が運転しながらカメラ構えてる」

今の鈴谷の声は呆れたようなものだった。

お願いだからよそ見して私の車に突っ込まないでよね。

けどとりあえず一安心ね。那珂ちゃんと神通が来た。訳のわからない暴走車両を止めてくれる。そう思っていた。

「……嘘」

鈴谷が手で口を塞いだ。

その動作だけは見えた。私はサイドミラーに視線を移す。

さっきまでそこにいた那珂ちゃんと神通がいらない。黒い車は平然と走っている。

「いったい何があったの……？」

「わからない。炸裂音が聞こえたと思ったら二人が落ちたの……」

炸裂音、あの二人が消えた。

行き着く答えは私には一つしかない。

「嘘でしょ……」